

レ・ミランド城のジョセフ・フィン・ベイカー

荒このみ

1 エリザベスサンダースホーム

あの長く暗いトンネルはふしぎな越境の道のりだった。

かつてこのトンネルの入り口に、母親は赤ん坊を置きざりにし、また幼子の手を離して、「トンネルの向こうへ歩いて行きなさいね。そこにおぼさんがいるから」と言い含めて、自分はトンネルから足早に遠ざかって行ったのだった。捨てられた子供たちはふつうの日本人の子供よりも、すこしばかり肌の色が黒かったり白かったりした。一九五〇年代のころの、大磯にあるエリザベスサンダースホーム入り口のトンネル。

乳児院エリザベスサンダースホームは、一九四八年二月に創立された。混血児の乳児院として知られるようになったエリザベスサンダースホームは、澤田美喜の始めた大きなプロジェクトだった。乳母日傘で育った三菱の岩崎家長女、そして外交官澤田廉三と結婚し、澤田美喜となった人が、戦後の日本の混血児問題に心を痛め、混血児の捨て子を育てるようになった、その始まりにあたっては、それがこれほどの大きな、そして果てしなく続くプロジェクトになろうとは考えてもいなかっただろう。だがその後、このホームから千人を越える数の子供たちが巣立ち、今ではホームも姿を少し変えて、それでも親が育てられなくなった子供たちを、いつでも百

「虹の部族」と「世界のキャピタル」

人近く抱えて育てている。今日のエリザベスサンダースホームは、当初の目的とは違って、預かり育てているのは混血児の捨て子ではもはやないのだが、基本的精神はかわらないところで、社会のなかで活動し機能している。そしてあのよく知られた薄暗いトンネルは今もある。

澤田美喜とアメリカの黒人歌手ジョセフ・フィン・ベイカーとの友情は、二人がパリで初めて出会った一九三〇年代のころから終生続く、お互いに信頼しあう深いかわりだった。アメリカのイースト・セント・ルイスという貧しい都会のスラムに生まれ、教育も十分に受けずに二〇代の初めに歌手・踊り子になって、いわゆるどき回りをしていたジョセフ・フィンと、岩崎家のお屋敷のなかでお姫さまのように育った澤田美喜との社会環境的な接点はない。それでも二人がお互いに感じていたものは、人種・宗教・地理的距離・社会的立場を越えて、同質のものだったのだろう。社会のなかに見られるあらゆる夾雑物や、表面に顕在化している異質なものすべてを透明化してしまう力を、二人は共有していたのだった。このようにお互いに異質なものはなく同質なものをより強く感じ意識する、その人間的な傾向に、私は二人の普通いっぽんとは違った特異な資質を認める。そしてその特異性が、常人を越えた規模の社会的仕事を成し遂げる原動力になっていたのだろう。越境の力などという素朴でたやすいもの

ではない。それは二人の関係を結びつけた、不必要な夾雑物を払いのける、透明化する力である。

澤田美喜とジョセフィン・ベイカーの二人が企てた社会的仕事は、孤児を育てるといってもっとも難しい仕事だった。澤田美喜は、敗戦を迎えてアメリカ軍の占領下にあった貧しい日本で、アメリカの兵隊と日本の女との間に生まれた混血児の捨て子を収容して育て、いつばうジョセフィン・ベイカーは、生まれ故郷のイースト・セント・ルイスやアメリカ合衆国そのものに根強く厳しく見られた黒人差別の体験から、肌の色による差別のない社会を夢見て、さまざまな人種の子供たちを養子にして、赤ん坊のころから一緒に育てようと決心した。子供のころからの環境と教育が、人種差別や肌の色を意識しない、いわば「新しい人間」を生み出すであろうと考えたのだった。そしてやがては差別のない世界が来ることを願って、南仏のレ・ミランドと呼ばれるお城を「世界のキャピタル(中心地)」と名づけたのだった。そこにジョセフィン・ベイカーは、世界から迎えて養子にした二人の子供たちを抱えて、新しい家族を作りだした。この新しい家族は「天のアーチ(虹)の部族」と呼ばれていた。

澤田美喜とジョセフィン・ベイカーの、二人の計画の目的や、また目的遂行のための努力のしかたや方法は、それぞれまったく違っていたと言ってもいいだろう。それでも二人がお互いに信頼しあい、困難な問題にぶつかるとお互いに励ましあうことがあったのは、それぞれの目的は異なっている、その理想とするところ、また人間としての生きかたにおいて、根本的にあい通じるところがあつたからだろう。エリザベスサンダースホームには、ジョセフィン・ベイカーの寄付によつて、一九五五年に建設された第一男子寮「ベーカーの家」があり、その建物の玄関の柱にはジョセフィン・

ベイカーの名前と言葉が刻まれている。また澤田美喜は、ベイカーを助けて「虹の部族」に愛情を注いでいた夫ジョー・ブイヨンとの夫婦の危機を知ったときに、別れないようにというやさしい言葉と、そして美喜らしい実際的な助言の手紙を送っている。

二人の強いつながりは、ジョセフィン・ベイカーの「虹の部族」の第一番目と第二番目の子供が、サンダースホームに引き取られていた二人の混血の男の子だったということにある。だがそれより前に二人はすでに親しい友人になっていたのだった。

一九三〇年代の初めに、外交官の夫の赴任に伴って、パリで暮らすようになった澤田美喜は、そこでジョセフィン・ベイカーと知り合いになる。小坂井澄著の『これはあなたの母』(1988)によれば、パリの亡命ロシア人の家で開かれたパーティで二人は出会っている(128)。そのとき澤田美喜は、ジョセフィン・ベイカーが、多忙な歌手活動のなか、三ヶ月ごとにパリのスラム街を慰問しているという話を聞いたのだったが、そこでジョセフィンと一緒に連れて行ってもらうように頼んだのだった。

そのころの思い出を澤田美喜は、『黒い肌と白い心——サンダース・ホームへの道』のなかで次のように書いている。

「ジョセフィン・ベイカーとの親交ができたのもそのころでした。彼女ぐらい威張らない、一流の女優はありません。彼女ぐらい劇場の上から下の人々までに愛され、慕われている女優もありません。幕引きの男から証明係まで、彼女はいつもその肩をたたいてその家族の安否を問い、子供が病気だといえ、楽屋に送られてくる花も、果物も、チョコレートも、なんでも惜しげもなくわけ与え、これを見舞うのでした。ひと興行すむと、

ジョセフ・フィーンは必ずオープン自動車に、山のようにお菓子のはいったかごを積みあげ、貧民窟の子供たちを訪ねるのでした。私は幾度かいつしよに行くことがありました。彼女はまるで救世主のように、貧しい人々から慕われていました。(略) 私はこのときのジョセフ・フィーンに魅せられてしまったのです。また、彼女は日本人のためになかを頼むとよく世話してくれました。日本へ帰りたくても帰れない日本人の幾人かに、黙ってマルセイユから日本までの船の切符を買って送ったことを知っています。セーヌの左岸の屋根裏に住んでいた日本人の、〈女流画家〉にも、私がニューヨークに去った後まで食料品などを届けてくれたり、いろいろ隠れた面倒をみてくれていました。私は彼女の紹介で、フランスの有名な芸術家をたくさん知ることができました」(103・4)。

澤田美喜がスラム訪問を願ったのには、前提になる体験があった。パリへ来る前に暮らしていたロンドンで、澤田美喜はドクター・バーナードウズ・ホームという孤児院を見学している。そしてある感慨を覚えていたのだ。自分の知らなかった世界に目を開かれたというだけではなく、そして生来の好奇心と行動力が孤児院見学へ足を向けさせたというだけではなく、澤田美喜を突き動かしたのは、ジョセフ・フィーン・ベイカーと同じように、ひとつのひらめき、天才的な好奇心、あるいは「啓示」であったにちがいない。それ以来、ジョセフ・フィーン・ベイカーやドクター・バーナードウズの行為とその人生観が、澤田美喜のこころのどこかに棲みつづけていたのだろう。

その後、澤田美喜は夫とともにニューヨークへ移るのだが、この町でもジョセフ・フィーンと美喜の二人は会っている。黒人であるがゆえにホテルでの宿泊を断られ、途方に暮れていたジョセフ・フィーン・ベイカーに、澤田美喜

は手を差し伸べた。ジョセフ・フィーンを自宅へ招き入れ、宿を提供したのだ。た。

ジョセフ・フィーン・ベイカーが初めて日本を訪れるのは、一九五四年の春のことだった。そのときの様子は、ジョセフ・フィーンの死後に出版された、ジョー・ブイヨンとジョセフ・フィーン・ベイカーの共著の伝記『ジョセフ・フィーン』に描かれている。ジョセフ・フィーンは、日本訪問が初めてであったにもかかわらず、「すばらしい人、ミキ・サワダのおかげ」で、「日本をよく知っているように感じていた」(102)という。ミキ・サワダに紹介されて、パリやニューヨーク、ロンドンの日本人たちとも知り合いになり、かれらを通じて、日本の「驚くべき文化に目を開かせられた」(102)とジョセフ・フィーンは書いている。このような個人的な親しさが、異なる文化への情愛をいかに育むかということについては、かならずしもこの二人の例ばかりではなく、私たち自身も多かれ少なかれ体験していることだろう。

ジョセフ・フィーンは、二〇年代のパリで、藤田嗣治のモデルをしたことがあったが、フジタを「友人の画家」と呼び、「平和の継承者」という意味であると説明されたその名前が気に入っていた。自分の養子になる子供は、「ツグハル」という名前のように優雅な名前を持っているのだろうか。この名前をフランス語表記にすれば、Tsuguharuという恐ろしく長い綴りになり、その文字の並びは奇怪に映り、そのうえかれらには発音しにくい名前であるにもかかわらず、ジョセフ・フィーンが気に入っていたのは、画家フジタ自身の魅力が名前の魅力に取りついていたからだろう。日本へ旅立つ前からすでに、日本への思い入れと、初めての自分の子供への思いをつのらせ、ジョセフ・フィーンは興奮していた。

2 「虹の部族」になる「占領の赤ん坊」

一九五四年に初めて日本を訪れたジョセフ・ベイカーは、「占領の赤ん坊 (Occupation Baby)」と呼ばれた混血児のなかから、山本秋雄と木村清治 (テルヤ) という名前の男の子を養子にする。アキオはアメリカ兵を父親に、今では在日という表現が一般化しているが、朝鮮人を母親にして生まれた。後にジャノと呼ばれるようになったテルヤは、アメリカ兵と日本人の間の子供だった。ホームの記録によると、アキオの生年月日は、昭和二七年七月七日であり、一歳半のときの昭和二九年二月三日にホームに入所している。テルヤの生年月日は昭和二八年七月二五日、入所は生後三ヶ月あまりの昭和二八年一〇月二七日である。もちろん記録にある生年月日が正確であるかどうかは、わからない。母親が子供の生年月日を伝えた場合もあったが、何も情報を残さずに子供を置いていった場合も多かったからである。アキオとテルヤの退所の日付は同日で、昭和二九年五月五日であり、退所の理由として「外人養子」と記されている。

この記録からジョセフ・ベイカーが、二人を正式に養子にした日付がわかり、またアキオとジャノとして知られていた、「虹の部族」の最初の二人の姓名が漢字を含めてはつきりする。もちろん記録のどこにもジョセフ・ベイカーの名前は書き込まれていないのだが、別の資料の脇に記された鉛筆書きの名前から、姓名がわかり、この特定の二人がジョセフ・ベイカーの養子になったことを知ったのである。そしてそれをもとに入所・退所記録を調べて見ると日付を知ることができたのだった。

ホームに保管されている資料には、ジョセフ・ベイカーが地味なスーツに身を包んで、澤田美喜と並んで、それぞれ赤ん坊を抱きながら、簡

素な椅子に座っている写真が残っている。背景には何人かの背広を着た男たちも写っている。写真から判断すると、ジョセフ・ベイカーが膝に抱いているのはテルヤで、美喜が抱いているのはアキオにちがいない。この簡素な白木の椅子は、神社で執り行われる儀式のときに使われる椅子のように見える。二人の養子縁組にあたって、神式の儀式が執り行われたのだろうか。

二人の男の子の姓名がわかったのは別の資料があつたからだだが、それは東京大神宮宮司坊城俊良による手稿だった。儀式で読み上げる名前の部分には二人分の空白の○ (マル) が四つ、点で区切られ縦に記されている。そして手稿の脇の空欄には二人の名前が書かれていた。山本秋雄 (二年十ヶ月)、木村清治 (九ヶ月) とあり、テルヤとルビが振つてある。養子縁組にあたって、神前の儀式を行うことを望んだのはだれだったのだろうか。聖公会のエリザベスサンダースホームや信者の澤田美喜が、神前で儀式を執り行うことを特に望んだとは思われない。神前の儀式はおそらく、日本に憧れ、日本びいきになっていた、ジョセフ・ベイカーの希望だったのだろう。

東京大神宮宮司坊城俊良の祝詞は、人種差別のある社会を批判し、この世に生まれ出てきた子供たちは、皆ひとしく「生きる喜び」を持つべきであると語っている。「生きる喜び」という基本的な感情を、まるで否定されたように生まれ出てきた子供たちの環境を思うとき、すでにはるか昔の出来事であつたにもかかわらず、読む者の心は深い痛みのなかへ導かれていく。坊城宮司の祝詞をジョセフ・ベイカーは、どのような心持ちで聞いていたのだろうか。その写真から見ると、穏やかなやさしさを湛えてジョセフ・ベイカーは、静かにそこに座っている。

坊城宮司による、「平和の守護神として いとも高くいとも尊き大御光

を仰ぎ奉る天照皇大神の大御前に 東京大神宮宮司坊城俊良 謹み敬
ひて白（もう）さく」とはじまる祝詞は、次ぎのように続いている。「人
としてこれの世に生れ出でし者は聊かの差別（へだて）も与えらるること
なく 同じ人間（ひと）として斉（ひと）しく生くる喜びを持つべきも
のなるを 人種的差別の尚この世に行はれつつあるはいと口惜しきこと
どもなり。ここをしも深く思ひ刻みて 人種的差別撤廃の為 年久しく
心を碎き 力を尽しつつある世界的歌手ジョセフィン・ベーカー女史は
この程この国を訪れ 混血児慈善事業の為の演奏会を各地に催し その
すぐれたる芸能を発揮して人々に深き感銘を与えられしが ベーカー女
史は去る四月十二日 澤田ミキ女史の主宰するエリザベスサンダースホー
ムを訪れ 戦争の残したる運命の幼児等（たち）の上に温き愛の手をさ
しのべ 恵みの数々を与えらるると共に その幼児等の中より〇〇〇〇、
〇〇〇〇と言ふ 二児（ふたりのこ）を選び これを自らの養子として
仏国につれ帰へり 強く正しき人間（ひと）にはぐくみ育てあぐることと
なりぬ ベーカー女史のこの行為（おこない）は 女史が嘗ての体験（く
らし）を通して得られたる尊き人類愛の信念（こころ）に基くところに
して世界の平和を祈り ひたすら人権擁護を立唱（との）ふる清き明き
誠心の表れにして強く人々の胸にせまるものありと言ふべし かれこを
設けて 今日をよき日と選び定め ベーカー女史を初め二人の幼児 亦
この事にあづかれる澤田ミキ女史 檜橋渡も 大御前に参り出で事の由
告奉ると共に行先の幸を乞祈み奉らくを 平らかに安らかに 聞食し諾
ひ給ひて 皇大神の限りなき神霊の幸を この新しき「母子」の上に授
け添へ給ひて この幼児等が彼の国にわたりて後も 病はしき事なく煩
はし事なく朝夕に守り恵み給ひて 母の心にそむかざるよき人とならし

め給ひ 亦この母がたまきはる命をかけて 世の人々に求めつつある厳し
き理想を成し遂げる営みの上にも 広き厚き御導きを垂れ給ひて 世の
人々が神の道を誠の道と持戴きて 心を合せ 力を一つにして 世界平和
実現の為 謹み努むるべく 守り給へ幸給へと 恐み恐みもうす」。

もちろんジョセフィン・ベーカーは、宮司の言葉を一つも理解しなかつ
ただろう。けれども、「虹の部族」の夢を抱いたジョセフィンが、最初の
子供たちを養子に迎えるにあたって、子供たちの国の宗教儀式によつて祝
福を受けたいと願つたその姿勢は、素朴で純真なものだっただろう。子供
を膝に乗せて抱きながら、儀式に臨んでいる神妙なようすのジョセフィ
ンの写真を見てみると、素直に自然に異質の文化を受け入れる、素朴で
天真爛漫なジョセフィンの性質が写っているように思われる。異質なも
のを、越境するのではなく、無化するのではなく、取り込んでしまう透
明化の力であるが、それはジョセフィンばかりでなく、聖公会の儀式を
主張しなかつた澤田美喜にも備わっている資質だった。

ジョセフィンは夫のジョー・ブイヨンに「虹の部族」の夢を語っていた。
肌の色の違う養子を二人づつ迎えて育てるという希望は、結婚してしば
らくしてからジョーは聞かされていたから、日本旅行から子供を連れて帰国
してもジョーは驚かないはずだった。ジョセフィン・ベーカーは病気や手
術のために、子供を産めなくなっていたし、一九四七年六月三日の誕生日
に、ジョーと結婚したときはすでに四二歳になっていたから、結婚して子
供に囲まれた家庭を築く夢の実現のためにも、養子を取ることを考えて
いただろう。「虹の部族」を構成するために、それぞれの肌の色の子供たち
を三人か四人、迎え入れるというジョセフィンの希望は、ジョーも知つ
ていた。けれども養子をどのようにして選ぶのだろうか。その具体的な方

法についてジョーは知らされていなかった。

伝記のなかのジョーの記述によれば、一九五三年二月二八日にジョセフ・イン・ベイカーは、パリで開かれた人種差別反対の集会に参加している。これは後述の LICRA の主催で、その関係で来日することになったのだ。集会の後、南仏のレ・ミランドへ戻ったジョセフ・インは、日本旅行の準備をしていたが、そのとき初めてジョー・ブイヨンに、「ブイヨン家の最初の子供を連れかえつてもいいかしら」と打ち明けたという。そこでジョーは、「私の最初の息子は東洋人だということを知ったのだ」と書いている（190・191）。それでも二人も連れて帰ってくることは予想していなかった。

アキオとテルヤの二人の東洋の子供を養子にすることになったのは、まったくジョセフ・インの「気まぐれ」からだった。

エリザベスサンダースホームを訪れたジョセフ・イン・ベイカーは、自分の子供になるのはどの子だろうと胸を躍らせ、できることなら子供たちを皆連れて帰りたいと語っている。たくさんいる子供たちのなかで、自分についてまわり、膝に這い上がって抱かれたがった男の子がアキオだった。「この子は韓国人」とミキ・サワダが知っている情報をすべておしえてくれた。それによると、アキオは雨を避けるために広げられた傘の下に置かれていたという。衣類に留められたメモには、生年月日の一九五二年七月七日という日付が書かれていた。首には赤い袋（お守りだろうか）がぶら下げられていて、「わたしは殺生はしない」と記されていたという。名前が書かれていなかった。ホームに捨てられていたのが秋だったので、秋雄という名前をつけたという（194）。

アキオを抱いて帰ろうと門へ向かったジョセフ・インは、門の近くに立つ

木の下に、座っている男の子を見つける。「その子の真面目そうな顔をわたしはじつくりと観察した。何かとても感動的だった」（205）という理由で、ジョセフ・インは、二人の子供を養子にすることに心を決めたのだ。

二人を抱いてレ・ミランドへ戻ってきたジョセフ・インを出迎えて、ジョーが驚かなかったはずはない。「結婚して九年、妻のことがわかるようになっていた。それでもジョセフ・インの驚くべき勇氣には、いつも度肝を抜かれた」（195）と記している。二人のうちどちらか一人と思い込んでいたジョーは、ジョセフ・インの「両方ともよ」という答えに、ふたたび度肝を抜かれたのだ。だが、それでもやさしいジョーは、「占領の子」は日本の問題であるとともにアメリカの問題であり、混血であることが、すぐに日本人の社会では差別の対象になることを感じとったジョセフ・インが、どうしても二人を連れて帰りたいなってしまう、その心のほうに共感を寄せている。ジョセフ・インの「驚くべき勇氣」は、周囲の人々から、「無思慮」という批判をしばしば浴びたのだったが、たしかに常識で考えればそうなるのだろう。だがそこに何事かを成し遂げる力を持った、透明化する力を持った、ジョセフ・イン・ベイカーと澤田美喜という二人には、天才的能力が備わっていたのだと私は感じ取っている。

エリザベスサンダースホームに残されている、ジョセフ・イン・ベイカー来日日程の資料によると、ジョセフ・イン・ベイカーの二行四名が、エールフランス航空機で、パリを空路出発したのが四月二日であり、羽田に到着するのは、四月三日になっている。すると、坊城宮司の祝詞原稿に記されている二日にホームを訪問したという日付は正確ではないことになる。

またアキオとテルヤのホーム退所の日付は五月五日になっていたが、この日付はジョセフ・フィン・ベイカーの離日予定の日付でもある。

四月二日から五月五日まで、三週間あまりにわたってジョセフ・フィン・ベイカーは日本に滞在したことになるが、その来日の目的は、澤田美喜に招かれ乞われて、混血児救済基金募集のための公演をするということのみではなかった。

ジョセフ・フィンとジョー、二人のJo共著の伝記によれば、来日の第一の目的は、人種差別主義・反ユダヤ主義に反対する国際連盟(LICRA)のフランス支部による依頼で、日本にも同様の組織を設立するために、ジョセフ・フィン・ベイカーが講演をするということだった(193)。

一九二七年に創設されたLICRAは、そもそもヨーロッパにおける反ユダヤ主義と闘う組織であったのだが、しだいに社会のさまざまな差別に目を向けるようになり、かつての南アフリカのアパルトヘイト政策、アメリカ合衆国における黒人差別、アマゾンのインディオ差別等々に反対する運動を展開していった。ジョセフ・フィン・ベイカーが来日した五〇年代の初めに、LICRAを世界的な組織にしようという活発な動きがあったのだろうか。ジョセフ・フィン・ベイカーは日本の聴衆を前にして、「わたしにはこの地球上でなすべき使命があると感じています。それは手遅れになる前に、人々が友情で結ばれお互いに理解しあうように手助けするという仕事です」(193)と語ったという。

カーチャ・モンテニャックの『ミランド城のジョセフ・フィン・ベイカーの家』によれば、ジョセフ・フィン・ベイカーは、一九三八年からLICRAの支持者だったそうである(50)。第二次世界大戦中には、フランスのレジスタンスで活躍したジョセフ・フィンであり、のちの一九六三年の「ワシントン大

行進」では、フランスから駆けつけて、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師と共に演説をしている。人種差別撤廃を求めて、世界の平和を求めて、歌手で踊り子のジョセフ・フィンが演説をするのはめずらしいことでも、奇異なことでもなかった。

ジョセフ・フィン・ベイカーの日本滞在の日程表によると、東京に着いた後は、名古屋経由で鳥羽へ行き、真珠島を観光し、そのあと大阪経由で福岡へ飛び、長崎・佐世保・福岡・名古屋・広島・東京・京都・大阪の順路で、公演日程が組まれている。東京では五日間の、大阪では二日間の公演が行われることになっているのだから、かなり過密なスケジュールだった。

混血児救済基金募集とうたわれた、エリザベスサンダースホーム主催・毎日新聞社・毎日新聞社会事業団後援の帝国劇場でのジョセフ・フィン・ベイカー公演プログラムが残っている。それには「唄い踊る琥珀の女王！豪華な巴里衣装!!」というキャッチフレーズで、ジョセフ・フィン・ベイカーの写真が載っている。一九五四年(昭和二十九)四月二五日から二九日まで昼夜二回行われた公演で歌われた曲目は、「巴里のシャンソン」と「アメリカのジャズソング」、「中南米のルンバ・マンボ・サンバ」で、「可愛いトンキン娘」「二つの恋」「私の村」など数十曲のなかから、日によって曲目を選んでうたったということである。そしてすでに述べたように、公演の収益金によって、エリザベスサンダースホームには、「ベイカーの家」が建てられることになる。

3 ジョセフ・フィン・ベイカーと日本

ジョセフィン・ベイカーは、当時の日本人にどれほど知られていたのだろうか。

澤田美喜とも知り合いの、ひとりの日本人の歌手がかくべつジョセフィンの影響を受けている。それは一九五〇年、アメリカへ音楽の勉強に行った石井好子で、留学先のサンフランシスコで、一九五二年のジョセフィン・ベイカーの公演に出会ったのだった。自伝『私は私』(1997)によれば、石井好子は戦前からのジョセフィン・ファンで、レコードをよく聞いていたというから、ジョセフィンの歌をこのときはじめて聴いたのではなかった。けれども生身の音楽を聴く機会はなかったのだから、このときの感動と刺激はたとえられないほど大きかったことだろう。

レコードでよく聞いていた歌手が、自分の住む町、サンフランシスコのゴールデンゲート・シアターで公演している。石井好子は初日から劇場に入り浸ったという。一日に昼夜二公演あったというから、これは日本の帝劇での公演と同じで、連日二公演というのは当時の慣行だったのかもしれない。石井好子は毎日、二公演を聞いたという。舞台のジョセフィンの様子を、次のように描いている。

「白いドレス、白い羽つきの帽子をかぶったジョセフィンは、ジャズ、ラテン、そしてシャンソンを歌った。語りもあり、踊りも入る。人びとの心をぐいぐいとひっぱっていくそのステージを見て、エンタテイナーとはこういう人の事をいうのだなと見あきる事はなかった」(41)。

毎日通ってくる東洋の娘に、劇場の支配人が目を止めてくれたことが、石井好子とジョセフィン・ベイカーの初めての出会いへつながっていった。支配人は進駐軍で日本に滞在したことがあり、そのとき芸者歌手の市丸の色気に惚れ惚れとしたという人物だった。それで日本人と知ると、好

意を示したくなつたのだろう。石井好子をジョセフィンの楽屋へ連れて行ってくれた。このときの記念の写真は、石井好子のその他の自伝にもしばしば掲載されている。

この出会いが石井好子をシャンソンの世界へ導くのだから、それこそジョセフィン・ベイカーは一人の人生を変えたばかりでなく、日本の音楽の風景を変えてしまった、といつても過言ではないだろう。日本の今日のシャンソン界へ、石井好子が成し遂げたその貢献については、歌手としてのみならず、音楽家の育成や招致に積極的に活動してきたという点で、だれもが認めうなずくにちがいない。石井好子とジョセフィン・ベイカーのこの出会いには、人種の壁を越えて、地球上の距離を越えて、芸術のつながり、人間のつながりが可能であるばかりでなく、そのつながる力のかえつて身体的・民族的・場所的な同質性よりも強くなりうることを示している。繰り返していおう。何かを越えるという越境の力ではなく透明化する力である。

ゴールデンゲート・シアターの楽屋でジョセフィンは、シャンソンを勉強するなら、パリにいかなくてはいけないと石井好子に勧めたのだった。その言葉を受けて、アメリカ留学だけで帰国するつもりだったにもかかわらず、予定を変えて石井好子はヨーロッパへ行く。そしてパリをほんのちよつと覗くつもりで、ニューヨークからパリへ向かったのだった。けれどもパリに着いた石井好子は、その努力の結果と、また幸運にも恵まれて、すぐにシャンソニエでデビューすることになった。その後、パリを本拠地にしてヨーロッパで二、三年、歌手として暮らすようになるのだが、サンフランシスコの初対面から二年あまりたったころ、石井好子はふたたびジョセフィン・ベイカーに会っている。ニースで開かれた音楽祭で、ジョセフィー

ンと同じ舞台で石井好子も歌ったのだった。そのときジョセフ・フィン・ベイカーは、石井好子にはサンフランシスコの楽屋ですでに会っていたことは覚えていなかったそうだが、「私の恩人マダム沢田のお招きで、四月に日本へ行くのよ」(200)と嬉しそうに語ったという。

その後、音楽エージェントになった石井好子は、ジョセフ・フィン・ベイカーを六〇年代、七〇年代に日本公演に呼んでいる。澤田美喜が羽田ヘンジョセフ・フィンを迎えに行くことができないというので、石井好子が代わりを努めたこともある。また養子のアキオが上智大学に留学した折には、ジョセフ・フィン・ベイカーの公演の収益の一部を大学の神父へ渡し、アキオの留学の支援をしてもいる。

このようにジョセフ・フィン・ベイカーと日本とのかかわりは、澤田美喜を通して、石井好子を通して少なからずあり、それは二過性のものでは決してなく、時間空間を越えた人間的なつながりとして存在し続けたのだった。そしてジョセフ・フィン・ベイカーの養子のアキオやテルヤ(ジャノ)がいるかぎり、そのつながりが消えることはない。

さて話を戻して、ジョセフ・フィン・ベイカーを迎えた、一九五四年当時の日本は、ジョセフ・フィン・ベイカーをどのように見ていたのだろうか。今日ではジョセフ・フィン・ベイカーの名前を知らない人々のほうが多いだろうから、当時、世界的にどれほど有名で、日本でも著名なスターであったのか、すこし紹介しておかねばならない。

エリザベスサンダースホームに残っている、ジョセフ・フィン・ベイカー来日当時の資料のなかに、東京の巴里会が澤田美喜へ宛てた手紙がある。丸善ビルにある財団法人日本国際連合協会東京都本部の住所が入った便箋

には、ジョセフ・フィン・ベイカーがぜひとも巴里会へ立ち寄るようにと懇請している。「十四日の夜 パリ会に(花馬車)二分間でも三分間でもベイカー女史が、立ち寄るよう御手配願上ます それは十五日の会を盛大にするために是非 何とかお願い致します 新聞のニュースになるのだそうです たちよったといふことだけでよろしいのです 29・3・30」と個人の名前の入った手紙がある。これを見ると、ジョセフ・フィン・ベイカーが、日本でもひっぱりだこだった様子がわかるだろう。エリザベスサンダースホーム訪問の写真に写っている報道陣の数を見ても、いかに注目される歌手であったのかよくわかる。

かつてパリで暮らしたことのある画家・芸術家岡田太郎のエピソードもまた、ジョセフ・フィン・ベイカーの日本での評判を伝えているだろう。岡田太郎が日本へ帰ってみると、みんながジョセフ・フィン・ベイカーと言って騒いでいるので、そんなに有名なのに自分が知らない歌手なんて、いつたいだれだろうと思っていた。そうしたら、「なあんだ、ジョセフ・フィン・ベイカーのことか」とびっくりしたそうである。フランス読みと英語読みの違いからきた食い違いだったが、これは日本でそれだけジョセフ・フィン・ベイカーが話題になっていたという証拠でもある。

その人気と高い評判は生涯、消えることなく続いた文字通りのスターであった。自分は家庭に入ると宣言したあとで、経済的理由から歌手に復活してみたり、生涯において何度か引退興行をやった歌手だったにもかかわらず、そのことで批判されたり、非難されたりすることはあまりなかった。それはジョセフ・フィン・ベイカーがエンタテイナーとして人々を楽しませ、その歌声は観客にひとときの夢を抱かせてくれたからだろう。人生最後の舞台になったパリのボビーノ公演を含めて、たいいていの公演が大成

功だった。その事実だけで、ジョセフィン・ベイカーは天才的だったとみなしていいのではないだろうか。

一〇代のうちにアメリカで名前がすこしは知られるようになったとはいえ、一人の踊り子・歌手でしかなかったジョセフィン・ベイカーが、パリで一夜にして有名になったのは、一九歳のときのことである。それから二〇代のジョセフィン・ベイカーは、はなやかな公演活動を行い、個人的にもゆたかなロマンスに恵まれて、人生の若いときをそれこそ充実した気持ちで過ごしていたにちがいない。養子になった子供たちも、ジョセフィン・ベイカーの死後に、かれらの母親を回想して、若かったこの時代が、ジョセフィンにとって、一番しあわせな時代だったのではないかと語っている。

たしかに、パリの観客を一夜にして虜にしまった、「野生の踊り（ダンス・ソヴァージュ）」は、若いジョセフィンにのみ可能な踊りだった。身体的な能力から、それをすでに若くないジョセフィンに求めても無理だろう。だからといって過去の栄光の助けを借りて、中年過ぎたジョセフィン・ベイカーが公演していたというでもない。歌手としてエンタティナーとしての魅力がなければ、六九歳の最後の公演まで、観客を魅了することはできなかったはずである。

一九六三年、六四年に東京で開かれたパリ祭コンサートに出演してもらった石井好子は、「もう六十歳だったが、脚線美はくずれず、歌も音程が低くなつてかえつて味のある歌手になつていた」と振りかえつて書いている（石井好子『さようなら私の二十世紀』（2002））。このときの日本公演が実現したのは、ジョセフィン・ベイカーの養子の二人、アキオとテルヤ（ジャノ）が、そろそろ成年期を迎えるので、「母国に留学させたい」（2009）というジョ

セフィン・ベイカーの願いからであった。

4 ストック・クラブの出来事とFBI

もう一度、五〇年代の話に戻れば、石井好子がジョセフィン・ベイカーに初めて出会った一九五二年のサンフランシスコの公演は、好評だったという。同年、ジョセフィンは、マイアミ、ロスアンジェルズで公演を行い、秋にはニューヨークで公演をしている。

ところが、ニューヨークに滞在しているときに、問題は起きたのだ。ニューヨークは、ジョセフィンにとって鬼門のような街だった。その前に帰国したときの一九三五年九月、一〇年ぶりに祖国アメリカへ帰ったというのに、アメリカ社会はジョセフィンを迎える準備はできていなかった。メディアの歓迎がなかったというのではない。シャンソン「二つの祖国（ふたつの愛）」はアメリカでも評判だったし、メディアはこぞつてジョセフィンを追いかけて、取り上げた。港に到着したジョセフィンにマイクを突きつけ、インタヴューをする記者の質問に、喜んで微笑んで答えているジョセフィンの映像が残っている。けれどもニューヨークのような大都会ですら、まだ黒人のジョセフィンを白人のように受け入れることはできなかった。三〇年代の半ばであれば、ハーレム・ルネサンスと呼ばれた、白人の黒人文化への熱狂が見られるようになってから、すでに一〇年が過ぎていたところである。それでもニューヨークという街では、白人専用のホテル・クラブ・デパート・レストランなど、厳しく人種隔離が実施されていたのだ。

一流ホテルのサン・モリッツに宿泊しても、連れ合いでマネジャーの白人ペイト・アバティーノは問題なかったのだが、ジョセフィンは黒人であ

るというので差別された。黒人という理由で宿泊そのものを断られたこともあれば、客用のエレヴェーターは使えず、従業員用のエレヴェーターに乗らなければならなかったこともある。パリであればどの大成功を収めたアメリカ人であれば、ヒーロー好きのアメリカ社会なら、浮かれ騒ぎになつて、もてはやされたとしてもおかしくない。ところがヒーローが黒人であるとは話がちがってくる。ジョセフィン・ベーカーのみならず、クラシックのコントラルト歌手でヨーロッパで大評判になったメアリアン・アンダーソン(1897-1993)の場合もそれは同じだった。

そしてそのような状況は、実は今日でも変わっていない。もちろん人種隔離の公共建物、ホテル、商店などは、もはや存在しないが、メディアの扱いが違ってくる。たとえばアフリカン・アメリカンの作家トニ・モリスンがノーベル文学賞を受賞したときの、メディアの「浮かれかた」はおとなしかった。白人の男の作家が受賞したのであれば、もつと扱いは違っていただろうというささやきは、そのころ巷でよく耳にした。

大スターのジョセフィン・ベーカーであっても黒人でしかない。そのような扱いを受けたのが、三五年の初めての「里帰り」のときの出来事だった。このときの悲しみをジョセフィンは生涯、忘れることはなかっただろう。そしてふたたび、みたび訪れても差別の構造は崩れてはいなかった。五年にサンフランシスコ公演の後、訪れたニューヨークで、屈辱的な差別の場面に遭遇したのだった。だがこのときのジョセフィンは、もはやおとなしく引き下がるジョセフィンではなかった。第二次大戦中に、フランスのレジスタンス運動を体験していたジョセフィンは、差別と世界の平和を損なう社会の構造やその権威的規範に対しては、そこから逃げる姿勢を拒否したのだった。だがそのためにジョセフィンはアメリカで、大々的な成

功を望めなくなつてしまったという人々もいる。アメリカ社会の精神風土があまりに遅れていたとも言えるし、ジョセフィンとアメリカとの相性が悪かったということなのかもしれない。けれどもジョセフィン・ベーカーの場合、ふしぎなことに祖国アメリカという意識はなくなつていたように思われる。祖国から拒否されたという悲壮感をジョセフィンが抱いていたとは感じられないし、かといつて祖国だったアメリカを否定していたのではない。そこを超越してジョセフィンはアメリカを、そしてフランスをとらえていたように思う。すなわちジョセフィンには透明化の力が備わつていたように思う。

一九五二年の出来事は、ニューヨークのストーク・クラブで起きた事件だった。一〇年後には、ノース・カロライナ州が始まった「シット・イン」が、南部のあちらこちらに広がつて、白人専用のランチカウンターを黒人が占拠するという抗議運動が起きたのだったが、ジョセフィン・ベーカーの事件は、まだ公民権運動の顕在化するはるか以前に起きたのだった。五〇年代のニューヨークでは、クラブやレストランなど厳しく人種隔離政策が行われていて、たとえば、黒人エンタテイナーの登竜門だったコットン・クラブは、エンタテイナーは黒人であっても、客として黒人が入ることは許されていなかった。

一〇月二六日の夜、ロクシー・シアターでの公演を終えたジョセフィン・ベーカーは、友人に連れられて東五三丁通りのストーク・クラブへ食事に行った。白人専用ではあったが、友人の誘いでもあったし、スターになつていたジョセフィン・ベーカーだったから、問題はないと考えたのだろう。クラブの入り口は常に固く守られていて、ガードマンは見知らぬ人が来れば、鎖を掛けて入り口を閉じてしまう。ジョセフィン・ベーカーを見たガー

ドマンはすぐにドアを閉めてしまったのだが、連れがミュージカル「南太平洋」に出演していたオペラ歌手のロジャー・リコだった。リコはクラブの常連で、予約をしていることを伝えると、ガードマンはドアをあけた。かれらはテーブルについてののだが、ところが注文したものがジョセフ・フィーンの分だけこなかった。これはよくある人種差別の方法だった。注文した品がいにく切れていたとか、まだ料理中であるとか何時間でも待たせるのだ。それで多くの黒人客は諦めて帰ってしまう。それを期待しているレストランの応対だった。

ジョセフ・フィーンの伝記によれば、リコの妻も一緒に、実はリコの妻は混血であり(18)、アメリカ社会では黒人と見なされる人だった。ところが肌の色は白人に近かったため、リコ夫人はまったく見逃されていたのだった。いわば白人として「パッシング(通過)」できてしまっていたのである。実際に目に映る肌の色によつて矛盾が生まれる一つの例であるが、このようなパッシングの例はアメリカでは星の数ほども起きていた。「パッシング」、すなわち法律のうえでは黒人であるのだが、実際の暮らしでは白人のように振る舞う。そのような黒人は、「社会的白人」と呼ばれていたが、そのようにして黒人であるための不便を回避しようということは、アメリカ社会の差別構造の特殊性から生じた、奇妙な現象であった。

ストーク・クラブのやりかたに憤慨したジョセフ・フィーン・ベイカーは、NAACP(全米有色人種向上協会)に電話をかけて、クラブの差別的な応対を訴えた。関係当局に連絡して、ストーク・クラブを調査するようにと要求したのだった。翌日から、NAACPのメンバーが組んだピケがクラブの前を歩き、NAACPの幹部はニューヨーク市長に抗議した。

NAACPがこのような敏速な処置をしたのは、半年前の五月に、ジョセ

フ・フィーン・ベイカーを「今年最高の女性」に選出し、五月二〇日を「ジョセフ・フィーン・ベイカーの日」に制定したという経緯もあっただろう。そしてすでにニューヨークの前に行っていた、フロリダ州マイアミでの公演で、ジョセフ・フィーン・ベイカーは、アメリカ社会の人種差別を撤廃するために、自分にできる行動を起こしていたのだった。NAACPという組織と行動を共にするジョセフ・フィーン・ベイカーではなかったが、個人として人種差別への反対運動をしていたのであり、それは結果的にNAACPの活動を助けることでもあった。スターのジョセフ・フィーン・ベイカーだから可能になることはたくさんあった。

この年の春に、マイアミのコパ・シティで行われた公演のとき、ジョセフ・フィーン・ベイカーは初めて黒人の観客を迎え入れることに成功していた。法律の上では禁止されていなかったにもかかわらず、差別の社会習慣のなかで、黒人がコパ・シティ・シアターで行われる公演を見る機会は奪われていた。ジョセフ・フィーン・ベイカーはマイアミ公演の契約のときに、その差別撤廃を絶対条件にしていた。苦慮するエージェントを前にして、ここで動かなかったのである。当時、南仏のレ・ミランド城の改修工事は進行中で、金は喉から手がでるほどに欲しかったときである。夫のジョー・ブイオンは提示された金額に、引き受けるべきであると感じていたが、それでもジョセフ・フィーン・ベイカーは自分の信念を崩すことはなかった。やがてどうにか折合いがついて公演が実現することになった。そしてジョセフ・フィーンの公演で初めて、コパ・シティの劇場は黒人にも開放されたのだった。その晩、舞台の上からジョセフ・フィーン・ベイカーは、白人と黒人が入り混じっている観客へ向かって次のように語りかけた。

「今日はわたしの人生でもっとも重要な日です。生まれ故郷の国で二六

年ぶりに初めて・・・これまで帰ってきて・・・だめだったのです。今日は、そんなことはすべて過去のことになりました。嬉しさをどうあらわしたらいでしょう。ここでこの町で、わたしの人々のために歌うことができるのです。みなさんと握手することができのです。今日はわたしたちにとって特別の日です。わたしたち、というのはすべての人間にとってという意味です」(175)。

ジョセフィン・ベイカーの公演も演説も大成功だった。その言葉にあるように、劇場が黒人の観客にも開放されたこの日は、たしかに黒人にとっての喜びの日であるばかりでなく、開放を成し遂げ認めた白人を含めた全人類の喜びの日であるのだった。ジョセフィン・ベイカーが偉大なのは、白人と黒人という二項対立的発想をしないところにあるだろう。ジョセフィンの透明化する力は、二つの人種に限られるのではない。あらゆる人間が対象なのであり、あらゆる人間が結び付き合わなければならないという、理性的というよりは本能的だった信念が揺るぐことはなかった。

このようなマイアミの大成功があった後の、ニューヨークだった。「そんなことはすべて過去のこと」になったとマイアミでは感じ、欣喜雀躍したジョセフィン・ベイカーだったのだが、ストーク・クラブの出来事は衝撃的で、ジョセフィンを大いに打ちのめした。そしてマイアミ公演のときに、ジョセフィンに出会って、ジョセフィンに言わせれば、もみ手で挨拶をしてきた著名な演劇評論家・コラムニストのウォルター・ウィンチェル(1897-1972)が、あの晩ストーク・クラブにいたにもかかわらず、見てみぬ振りをした。それがジョセフィン・ベイカーをさらに憤慨させたのだった。男の批評家は、自分の利益になるときにしか、黒人のほうへ視線を向けない。

ウィンチェルのコラムは影響力が絶大で、ショウ・ビジネスの世界では、「あのコラムのなかで日は昇り、日は沈む」(180)と噂されていたほどである。ラジオのトークショウでは、何百万人の聴取者を持つ人気パーソナリティで、また全米へ配信される新聞のゴシップ欄を担当していたから、そこで何を書かれるかは、ショウ・ビジネスの関係者の運命を決定するほど重要だった。そのような全米の芸能オピニオン・リーダーだったウィンチェルだからこそ、また自分自身がユダヤ人で人種差別に反対していたはずだったからこそ、ウィンチェルの無視はよけいに腹に据えかねたのだろう。翌日からジョセフィン・ベイカーのウィンチェル非難が始まり、ウィンチェルは激昂して、ジョセフィン・ベイカーを「反ユダヤ主義者、ファシスト」、「いんちきジョセフィン」(ジョセ・フォーニー・ベイカー)と呼んで非難しあつた。そしてストーク・クラブの出来事は、いっそう混乱していった。

ウォルター・ウィンチェルは、この事件ではジョセフィンを打ち負かした形になり、表面的にはウィンチェルの意見が強く支持された。差別の構造のあるアメリカ社会のなかで、人種隔離の習慣のほうが支持され、ウィンチェルは勝ったのだった。それでも闘いの過程で、ウィンチェルは激怒のあまり理性を失い、人種差別的な発言をして、結局のところ、この事件は双方にとって心地悪い記憶として残ることになった。また勝ったはずのウィンチェルだったが、その強烈な影響力と、栄光に包まれた演劇批評家としての立場はもはや輝きを失っていった。ジョセフィン・ベイカーもこの事件の直後に映画の契約がキャンセルされたり、多大な損害を受けている。ストーク・クラブの出来事は、その後一五年にわたって、ジョセフィン・ベイカーのキャリアに影響を及ぼしたという。一五年というのは人種差別に対するアメリカ社会の空気が変わっていく六〇年代半ばまでというこ

とだろうか。

このことに関連してもうひとこと述べておきたい。

最近、アメリカ連邦政府の情報機関であるFBIの資料が、情報公開法（フリーダム・オブ・インフォメーション・アクト）によって、一部閲覧できるようにになっている。そのなかにはジョセフ・フィン・ベイカーの資料も作成され保管されている。ジョセフ・フィン・ベイカーの調査資料のファイル番号は62-95834で、三五九頁におよぶ。もちろんなかには黒塗りにされた部分も多くあり、判読できないところがある。だがここで私の注意を引いたのは、その最初のファイルであった。ファイルの最初にあったのは、ウォルター・ウィンチェルからFBIへ宛てて出された手紙類に関するものだったのである。その意味は、ジョセフ・フィン・ベイカーの思想的背景を調査するファイルが作成されるきっかけが、ウィンチェルの手紙によっていたということである。

ジョセフ・フィン・ベイカー関連とファイルされたこの調査書には、一九五一年二月五日という日付があり、それはストーク・クラブの事件の直後のことである。ウィンチェルは自分のところに寄せられた数葉の投書を添付して、FBI長官のフーヴァーに直接呼びかけながら、「フーヴァーよ、これに関して調査してくれないか」と依頼しているのである。ウィンチェルとFBIがそれほど密着していたことを示す証拠である。ウィンチェル自身の手紙じたいは情報公開されていないので、引用された文章以外には読むことができない。ジョセフ・フィン・ベイカーに関するこの最初の書類は、おそらくウィンチェルの手紙に対して調査員が、FBIのジョン・エドガー・フーヴァー長官（1895 - 1972）に許可を求めているのだろう。その文書は次のように記されている。

「添付の手紙類はウォルター・ウィンチェルから送られてきました。最近、ストーク・クラブの出来事に関わった、有色人種の歌手ジョセフ・フィン・ベイカーに関するものです。最初の手紙は某氏からで、一九三六年にレニングラードで、ジョセフ・フィン・ベイカーを見たと言っています。ベイカーはそのときソ連の招待で来ていました」。

その他の添付資料の手紙も、ウォルター・ウィンチェルの読者・聴取者・ファンから届いたものであり、どれもジョセフ・フィン・ベイカーを個人的に中傷する内容である。いわく、ジョセフ・フィン・ベイカーは、なぜ黒人のメイドを雇わず、ロシア人のメイドを雇うのか、など。ジョセフ・フィン・ベイカーが共産党とつながっているという印象を与えようとし、ソ連のシンパである、反アメリカ的であるということを証明しようとする。その書きかたも冷静であるよりは、感情的にジョセフ・フィン・ベイカーを憎悪し、黒人を憎悪する気持ちが行間から読み取れる。さらにレニングラードの目撃談といつても、すでに一五年も前の出来事であるのに、それをいまさら問題化しようとする。

ウォルター・ウィンチェルはこのような無責任な一般の人々からの投書をとつこにとつて、連邦政府の力を動員して、ストーク・クラブ事件で、ジョセフ・フィン・ベイカーを不利な立場へ追いやる文章を書こうとしたのではない。ウィンチェルがジョセフ・フィンへの挑戦の過程で使った手段は、このようにあこぎなものだった。当時、ウィンチェルがFBIに強いコネクションを持っていたということを世間はまったく知らなかった。おそらくジョセフ・フィン・ベイカーも知らなかっただろう。ウィンチェルは、ジョセフ・フィン・ベイカーの共産党とのかかわりを疑ってみせ、それだから調査したほうがよいと提案したのだった。その結果、FBIは調査を開始するのだが、

もちろんジョセフ・フィーンは、最終的に、政治的に問題がないと判断されている。このあたりの経過は、FBIの資料に詳しい。

けれども五〇年代のマッカーシーの赤狩りが激しくなる社会風潮のなかで、「赤だ」という嫌疑をかけられることじたいがすでに致命的であり、社会的にほとんど抹殺されることを意味していた。それを考えると、ウインチェルは、なんとも姑息な手段を取って、ジョセフ・フィーン・ベイカーを攻撃したのだった。しかも秘密裏にFBIと関わりつつ、ウインチェルのコラムのなかで「日は昇り、日は沈む」と言われたほどの権力の行使は、もはや純粹に、心から、ショウ・ビジネスの発展を願って仕事をしていたのかと疑いたくなってくる。ウインチェルは、自分が豊かに暮らせることのみを望んでいたのではないか。

東五三丁通りのストーク・クラブは、ウインチェルにとつて、ゴシップ収集のための格好の場所だった。クラブにはウインチェルが定席とするテーブルがあつたほどである。あの晩の事件で、ウインチェルがジョセフ・フィーン・ベイカーの味方をすれば、ストーク・クラブの白人専用という運営方針を攻撃することになってしまう。そうなればクラブの支配人と気まずくなり、ストーク・クラブへ通うことが出来なくなり、したがってゴシップのネタを集められなくなる。ジョセフ・フィーン・ベイカーに言わせれば、ウインチェルが臆病風を吹かせて、あの出来事が起きたとき、自分はその場にいなかったと主張したのは、すべて「ミール・チケット(食事券)」のためということになる。自分のふところさえ潤されればそれでよいという考えかたである。ジョセフ・フィーン・ベイカーは、怒つてこのような暴言を吐いたのだろうか、ウォルター・ウインチェルのフーヴァー長官との秘密のやり取りを読んでいると、ジョセフ・フィーン・ベイカーの本能的な感覚、その直

観が正しく言い当てたことではないかとも私は思う。

ウインチェルがFBIへ出した秘密の調査依頼のこの手紙は、その後、数年間、ジョセフ・フィーン・ベイカーをFBIの監視下におくことになる。日本公演のときもそうだったらしい。五四年四月の日本公演の準備をしている段階で、澤田美喜が「木下様」へ宛てた手紙のなかに、このことと関連すると推測される箇所が出てくる。澤田美喜は次のように書いている。「アメリカ中よりベーカーの記事をみて出問してくる各方面への答を用意してゆかなければならないこと。ベーカーに対しホームに対していつも手をおえ品をかえてじゃまをする見えざる敵達に対して・・・」というような表現が見られるのである。

五〇年代初めのアメリカは、冷戦構造のなかで共産主義・ソ連・反アメリカを極度に恐れていた。澤田美喜のエリザベスサンダースホームの事業も、アメリカの兵隊が成した不始末を、ことごとしくおおよけにしている。これは反アメリカ的行動であるという非難がなされていたのだった。アメリカ政府にとって、アメリカ占領軍の汚点といえる混血児の問題には、目を伏せておきたかつたのだらう。

いつばうジョセフ・フィーン・ベイカーも、ストーク・クラブ事件の翌年に、南米公演で訪れたブラジルで、アメリカの建国の理念である民主主義が、ブラジル社会で根づいていると言つて、ブラジルを賞賛するスピーチをする。それをふたたびウインチェルが取り上げて、反アメリカ的行動を取つているとジョセフ・フィーン・ベイカーを非難したのだった。ジョセフ・フィーンは、ブラジルの聴衆を前に、異なる人種が調和して暮らす世界への理想を語つただけなのである。

「みなさまの輝く顔を見ていると、わたしはとても嬉しくなります。そ

それぞれの顔には先祖の痕跡があります。それは白かったり、黒かったり、黄色や赤色です。わたしの高い理想とする、夢とするものが、ここブラジルで実現しているのです。異なる人種が一緒に楽しく暮らせるとわたしは信じてきました。その理想をブラジルの人々が現実のものとした、そのやりかたをわたしは心より讃美します。この状況が、未来の社会のありかたなのだとわたしは思います。だからこそブラジルを、民主主義の象徴と見なすことができるのです」(185)。

ウインチェルは、「ジョセフ・フィン・ベイカーは、反アメリカの大規模なプロパガンダ・ツアーを開始した」(186)と書いて、ジョセフ・フィンに共産主義シンパの刻印を押そうとしたのだった。そのような状況だったから、日本公演中も、ジョセフ・フィンが反アメリカ的行動をするのではないかと恐れられていたのだった。

のちの一九六三年に、首府ワシントンで開かれた、「職と自由のためのワシントン大行進」へ参加しようとしたジョセフ・フィン・ベイカーは、連邦政府移民局に入国を阻止される。そのとき入国許可がおりるように手配したのが、当時の司法長官だったロバート・ケネディで、大統領の兄に特別に許可するように懇請し、ようやく八月二八日の大行進に間に合ったのだった。このときまで、ジョセフ・フィン・ベイカーに反米分子のレッテルを貼ろうとしたウォルター・ウインチェルの影響がおよんでいたのである。

5 「世界のキャピタル」のレ・ミランド城

人種差別への激しい怒りが、南仏のレ・ミランド城を、「世界のキャピタル」にしたいという希望になって、ジョセフ・フィン・ベイカーの心を動かして

いった。憤慨して抗議しているだけではなく、自分のできるところで活動し実現しようという姿勢は、ジョセフ・フィン・ベイカーの人生を左右していた。それがジョセフ・フィンを歌手・踊り子として成功させ、ショウ・ビジネスの世界から離れたところでも、人間として情愛深い大きな人物にしていたのだろう。

ジョセフ・フィン・ベイカーは、第二次大戦中に、自由フランスの特別情報員だったフランス人ジャック・アプティ少佐に頼まれて、レジスタンス運動に参加する。そしてその活動を通して、積極的に人種問題について発言するようになっていった。この時期にはまだおそらく、「虹の部族」という理想社会を建設したいという、はつきりとした夢を抱いてはいなかっただろう。レジスタンスの活動中にジョセフ・フィン・ベイカーは病気になる、入院して治療している。また流産したことがあるとも言われる。おそらくジョー・ブイヨンと結婚することになり、あるいは、結婚と家庭ということをついに思い描き始めたところから、「虹の部族」という夢を抱くようになったのではないだろうか。

けれどもジョセフ・フィン・ベイカーの子供好きは、昔からだった。すでに一九三〇年代のはじめには、パリの孤児院を訪問し、スラムの子供たちを慰め、プレゼントを運んでいた。そのようなジョセフ・フィンの姿を見て、澤田美喜はジョセフ・フィンの愛情の豊かさと、その活動に大いなる感銘を受けていたのだった。ジョセフ・フィンが若かったころからすでに、のちの「虹の部族」を夢見る萌芽があつたにちがいない。

日本公演でも歌った「私の村で (Dans mon village)」というシャンソンは、一九五三年六月二〇日にバンド指揮者だったジョー・ブイヨンの率いる、

「ジョー・ブイヨンとオーケストラ」の演奏によってレコード化されている。五四年に來日したときには、それはまだ新しい歌だった。日付からもわかるように、「私の村」というのは、南仏のレ・ミランド城の理想の世界を指している。ここでジョセフ・フィン・ベイカーは、城を宿泊可能なホテルに改修し、周囲の農場をいわば観光農場にして客を募り、その観光事業を経済的支えとしながら、「虹の部族」を養おうという計画を立てていた。そしてそこを「世界のキャピタル」にして、理想の社会を築こうとしたのだった。

四〇年代の初めから、ジョセフ・フィン・ベイカーは、この城にはしばしば滞在するようになっていた。レ・ミランド城は知り合いの医者所有だったが、この城が気に入っていたジョセフ・フィンは、四七年にこれを譲り受け、この城の屋敷内のチャペルで、ジョー・ブイヨンと結婚式を挙げたのだった。それにしてもなぜ南仏の田舎の、パリからは汽車でも自動車でも不便なところにあるこの地域の城をえらんだのだろうか。

レ・ミランド城をジョセフ・フィン・ベイカーが所有していたのは、一九四七年から六八年までの二〇年あまりの期間だった。六八年に観光ホテル・農場が経営破綻に陥り、手放さざるをえなくなった経緯は、またひとつの物語になるのだが、ここではまず、レ・ミランド城とその地域に目を向けてみたい。

レ・ミランド城が築城されたのは、一五世紀のこと、施主はカステルノの領主フランソワ・ドゥ・コーモンであり、そのドゥ・コーモン家が二四八九年からフランス革命の起きた一七八九年まで、この城の所有者だった。その後、公証人、実業家の手に渡り、一九二〇年からジョセフ・フィン・ベイカーによって買われる四七年までは、マルという名前の医者が所有し

ていた。そしてジョセフ・フィンのもと今日までに、城は三人の手にわたり、一九九四年からの所有者が、レ・ミランド城をジョセフ・フィン・ベイカーの博物館として一般に公開している。

レ・ミランド城がある南仏のドルドーニュ・ペリゴール地方は、ペリゴール・ノワールと呼ばれるトリュフと、南仏産のフォアグラで名高く、フランス料理好きには垂涎の町である。トリュフ入りオムレツは、城から二〇分くらい離れたもつとも近い町サルラの名物料理になっている。

サルラは中世の名残りのある町で、その近くにはロスタンの戯曲で、日本の芝居好きによく知られている「白野弁十郎」、すなわち「シラノ・ド・ベルジュラック」の名前を冠した町、ベルジュラックもある。古い歴史を感じさせてくれるこのような小さな町を訪ねたり、またレ・ミランド城のような城がこのあたり一帯に点在しており、お城の見学をする観光客など、ドルドーニュ地方は、フランスでも人気のある景勝地に数えられている。さらにこの地方には、ル・フォン・ドゥ・ゴム洞窟のほか、世界遺産にもなっている先史時代の居住跡の洞窟が散在している。このような洞窟のなかには、スペインのアルタミラの洞窟で発見された動物の線画に似た図像が残っている。洞穴の壁に彫像が残っている洞窟もある。一見のどかな農村地帯に見えるこの地方は、はるかなる昔から人々が居住していたのであり、その表面だけではなく、地面の下にも人類の生きた痕跡が今日まで残っているのである。人間が「生きる」意味を感じさせてくれるところなのである。それでも南仏のもつと大きな町とは違って、交通の便はよくないし、町じたいも小さいから、車を運転しない外国からの訪問者には、かなり到達しにくい場所である。

ある日曜日の朝、私はパリのオーステルリッツ駅を二〇時二分に出発し

て、リモージュなどを経てスイヤックという駅に到着した。すでに午後
三時を過ぎていた。そこから国鉄バスに乗り換えて、四〇分ほどしてサル
ラの町へ到着する。汽車のスピードがおそらくはるかに速くなっていると
思われる今日でも、スイヤックまでパリから五時間はかかるのだから、ジョ
セフィン・ベイカーが通っていた五〇年代には、この行程は骨の折れる大
移動だったにちがいない。レ・ミランド城は、サルラの町からまた田舎道へ
入っていき、車で二〇分はかかる丘の上に立っている。

私は電車とバスを乗り継いでサルラに到着し、ホテルで旅装を解いて、
ようやく翌日、レ・ミランド城まで行つた。レ・ミランド城へは帰りの足
を考えてハイヤーを半日雇い、ようやく目的地に足を踏み入れることがで
きたのだつた。



レ・ミランド城（ドルドーニュ地方）

パリからひたすら南へ、そしてやや西へ向かつてのこの長い旅路は、今、
地図でたどりなおしてみると、あのエリザベスサンダースホームのトンネル
をくぐったときのような、不思議な感覚を私のなかに呼び起こしてくる。
ジョセフィン・ベイカーも澤田美喜も、「世界のキャピタル」を、制度とし
ての捨て子の施設ではなく、「ホーム」を築こうとして長く困難な旅路を
歩むことになったのだつた。その旅路は、澤田美喜の言葉を借りれば、「見
えざる敵達」との闘いになるのだが、かれら二人に共通していたのは、困
難を前にして怯えることがなかったことである。「恐怖」にくじけることは
なかった。勇敢な人間だったからというだけではない。それは二人ともに
信念の人だったからである。ジョセフィン・ベイカーは本能的な信念の人
であつた。

レ・ミランド城のジョセフィン・ベイカーの展示資料のなかに、面白い
書面があり、壁に掛けられていた。それは「二九三年にジョセフィン・ベ
イカーが、自分をインタヴューして」と題されている。フランス語で書か
れた次のような自画像的リストである。

「八歳のときに、わたしは働きはじめた——宿命。

空腹を抑えるために苦しんだ、空腹と寒さを——人生の苦悩

わたしには一つの家族がある——世界

世間はわたしを醜いという——自然

わたしは猿のように踊る——人間動物学

子供のころわたしはもつと醜かつた——化粧

（略）

わたしは道徳そのもの——確信

世間はそうは思わないかしら——？

タバコは吸わない——白い歯が好きだから

お酒は飲まない——わたしはアメリカ人だから

わたしには一つの宗教がある——信頼

わたしは子供たちが好き——ママンとかれらは言う

(略)

わたしは貧しい人を助ける——自分がとっても貧しかったから

わたしは動物が好き——かれらは一番誠実

わたしはうたい踊る——忍耐

(略)

この自己インタヴューは、ジョセフィン・ベーカー像をよく描き出している。

ジョセフィン・ベーカーが、まだ二五歳だった一九三二年のこのときに、すでにジョセフィンは「世界」を家族と考えていたのだった。子供が好きだということも記している。それに自分をよく見つめる客観的な視線を持つていることに驚く。略してしまつて書き入れなかったが、ジョセフィン・ベーカーは、自分には人生のチャンスがあつたことをよく認識しているし、また自分は成功したけれど、「金銭を愛してはいない」とはつきり書いている。

アメリカのサクセス・ストーリーでは、成功とはかならずや金銭的な成功を意味していた。金持ちにならなければ、「アメリカの夢」を実現したことにはならない。それに照らしてみると、ジョセフィン・ベーカーはまさにアメリカの夢の体現者だった。「ぼろきれから金持ちへ」という少年

の出世物語が、一九世紀後半のアメリカではよく読まれていた。田舎の貧しい少年が都会へ出て、靴磨きなどをしながら、頼る者もなく、自分の才覚だけを頼つて勤勉に働く。やがてその正直な態度が気に入られて、一段上の仕事につくチャンスが到来する。その少ない機会を逃さずに捉えて、そこでもまた真面目に働く。するとさらに金銭的成功への道を歩むことになる。

このようにして主人公は、金持ちになっていくのだ。何よりも踊りと歌が好きだったジョセフィン・ベーカーは、アメリカのサクセス・ストーリーの主人公のように、チャンスを捉えようと努力した。「真面目に、勤勉に」滑稽な振りで踊つて、観客を喜ばすエンタテイナーになった。そして家族の助けもなく、ひとりで道を開いて、ヨーロッパで大々的な成功を収めたのだった。まさにアメリカの「英雄」のはずである。ところが祖国アメリカで、ジョセフィン・ベーカーは「英雄」にはなれなかった。黒人でもか、もろ手を挙げてアメリカ社会に歓迎され、人々の英雄になれるような政治的社会的土壌は、アメリカにはなかった。

パリで大人気を博し、経済的に豊かになり、自由になる金を持つようになったジョセフィンは、パリの郊外のヴェジネットという町に大きな館を所有する。そこにヒョウや猿やインコなど好きな動物はなんでも飼ひ、洋服を買い集めた。そのためひどい浪費家のように映つていた。けれども「金銭を愛してはいない」というのは、ジョセフィンの真実の言葉だろう。ジョセフィンの豪華な衣装は観客を楽しませたのだったし、動物を飼うのは、ストレス解消のためであり、エンタテイナーとしての楽しい話題作りでもあつただろう。ジョセフィンのにとって、金銭そのものが目的になることはなかった。それがアメリカ的なサクセス・ストーリーの「精神」と

ずれていくところだろう。ジョセフィン・ベイカーは、アメリカ的なサクセス・ストーリーなど信じていなかった。その人生の目的は、つまらない世俗的なところにはなかった。

自己インタヴューのなかで、ジョセフィン・ベイカーはわざわざ、自分は宗教を持つと言っている。けれどもそう言いながら、ジョセフィンの宗教は、制度としての特定の宗派や教会に属することを意味していない。自分自身の確信・自信・信念を「信仰」するのである。だからここで「わたしは道徳そのもの」と言っているのは、冗談でも軽口でもなく、自分には、だれにも支配されない、付和雷同しない、自分の強固な価値判断があることを強く主張しているのである。その言葉のなかにも、体制主義的な側面のアメリカや、一九世紀のヴィクトリア朝風の「お上品な伝統」に決して与しないジョセフィン・ベイカーの、個人主義に根ざした堅固な姿勢を感じ取ることができる。

レ・ミランド城があるこのドルドーニュ地方には、第二次世界大戦の間、レジスタンス運動にかかわる人々や、ナチの迫害を逃れたユダヤ人など、いわば反体制の人々がひっそりと隠れて暮らしていたという。レジスタンスの活動にかかわるようになると、ジョセフィン・ベイカーのミランド城も、その関係の人々が泊まるようになっていった。もともとこのころは、まだジョセフィン・ベイカーの所有になってはいなくて、大家の医者から借りて、レ・ミランド城に滞在していたのだった。

ここは大会のパリから地理的に離れていて安全だったのだろうか。南仏の農家は隠れ家に適していたのだろうか。後に、ジョセフィン・ベイカーが「世界のキャピタル」と呼ぶレ・ミランド城のあるドルドーニュ地方が、独裁や圧政に苦しむ人々のひそかに隠れ住むところになっていたこと

に、神秘的にすら映る、ある符合の一致を見る思いがする。

ドルドーニュ地方の住人が、政治的な不都合から隠れ住む人々に対して、特に寛大だったのだろうか。そのような自由な雰囲気があるところなのだろうか。あるいは素朴に単純に、人間を受け入れ、洞窟の住人のようにその居住を可能にした先史時代からの遺伝子のような要素が、「土地の霊」のなかに潜んでいるのだろうか。

日曜日の朝にパリから南下した私の電車の旅は、のどかなドルドーニュ地方の畑や、美しい川、緑の林の風景に目はなごみ、フォアグラやトルフュの豪華な味に人生の豊かさを感じるとともに、精神的にも自由と解放への力が予感できるような移動の旅だった。ここはアメリカの南部への旅路とは対照的に、空間的のみならず時間的にも、たった今の現実を忘れさせ、精神の自由な活動を促して未来の理想へ向けての発想を助けるような、現実と時間を超越する透明化の力が感じられる地域である。

ジョセフィン・ベイカーは、レジスタンス運動の情報活動を助ける合間に、レ・ミランド城へ戻ってきた。やがてレ・ミランド城を自分の本拠地にして、「虹の部族」を育てようと決心するにいたっては、フランスのレジスタンス運動の体験があつたからだろう。その運動が追い求めたフランスの自由を、ジョセフィンはさらに人類の自由の探求へと発展させていった。

ジョセフィン・ベイカーを情報活動員にリクルートしたアプティ少佐は、初めて対面したときから、ジョセフィン・ベイカーを信頼する。アプティ少佐の著わした『ジョセフィン・ベイカーの秘密の戦争』によれば、活動員の条件には、「勇気・直観・知性」(28) が求められるが、ジョセフィンにはそれらが備わっているとアプティ少佐はすぐに認めたのだった。そし

てジョセフィン・ベイカーが、フランスを「わたしが選んだ国(養国)」(20)と言ったときには、心から感動したと述べている。

ジョセフィン・ベイカーは、アプティ少佐の依頼に対して、自分の受諾の理由を次のように述べている。

「今日わたしがあるのはフランスのおかげです。わたしはフランスに対して永久に感謝の気持ちを抱き続けるでしょう。フランスはやさしく、人種差別がありませんから、有色人種が暮らすのに適しています。パリの人々に愛される子にわたしはなつたのではないでしょうか。みんながわたしに、あらゆるもの、とりわけ心をくれたのです。わたしもわたしの心を与えてきました。今は、わたしの命を捧げましょう。わたしの言葉通りに受けとって、わたしを使つてくださつて構いません」(20・21)。

この言葉は誇張でも何でもなかった。じつさいにジョセフィン・ベイカーを大きく育てたのは、フランスであり、フランスで出会った人々であつた。アメリカにとどまっていたら、今日私たちの記憶に残るようなジョセフィン・ベイカーは生まれなかつただろうと、推定ながら私はほぼ確実に断言できる。ジョセフィン・ベイカーをかくも育て上げるフランス社会の、そのどこかに潜む見えない力を、いかに理解したらよいのか。論理的に説明する言葉を見つけるのはむずかしい。

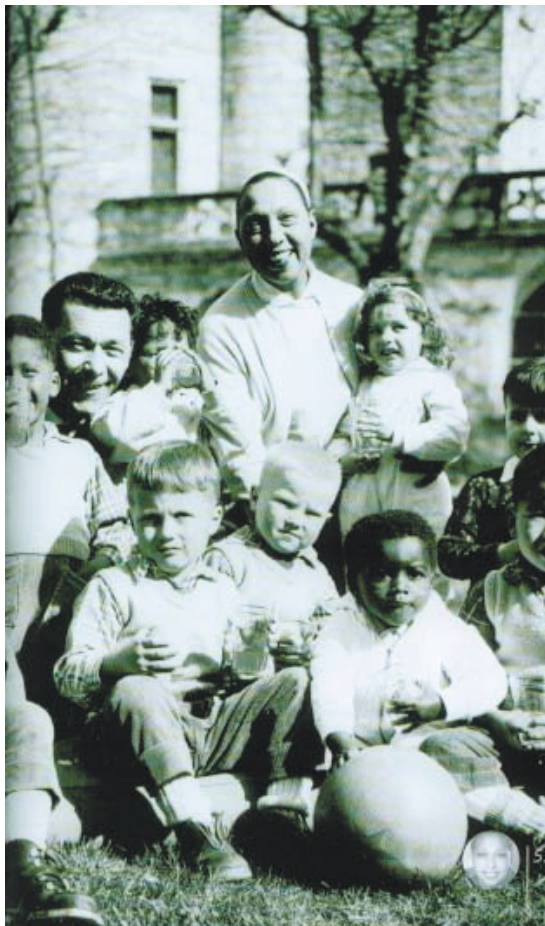
ジョセフィン・ベイカーを語るときに、とりわけ身近な男たちの存在を無視することはできない。偽の貧乏貴族だと陰口を叩かれ続けていたペイトにしろ、「虹の部族」を育て上げたジョー・ブイヨンにしろ、ジョセフィン・ベイカーの人生において、周囲の人々の力は果てしなく大きかつた。けれどもまたいっぽうで、そのような男や女たちを引きつける力が、ジョセフィンにはあつたのであり、またジョセフィンがかれらを選んだ

のでもあつた。そしてかれらを通して、自分自身でわが身を育てていったのである。そこがジョセフィン・ベイカーの偉大なるゆえんなのだが、それはまた別の物語になる。

ジョセフィン・ベイカーが、レ・ミランド城を「虹の部族」の館にして、そこを「世界の中心(キャピタル)」にしようと考えた、その根底の精神を動かしていたのは、生まれ故郷のアメリカにおける人種差別の実情だつた。ジョセフィン・ベイカーが育つたイリノイ州のイースト・セント・ルイスは、特別な町だつた。

ジョセフィン自身もしばしば語っていることだが、ジョセフィンがまだ幼い少女だつた一九一七年七月二日に、イースト・セント・ルイスで人種差別の大事件が起きている。この年の四月にアメリカ合衆国は第一次世界大戦に参戦したのだが、欧州の戦争はすでに一九一四年から始まつていた。そのためにアメリカへ移民してくるヨーロッパからの人口が減り、あるいはすでにアメリカに渡つていた人々が、戦役に就くためにヨーロッパへ帰つていった。その結果、アメリカの工場では労働力が不足し、それを補うためにアメリカ南部の黒人たちがリクルートされたのである。一九一六年以降、黒人たちが大挙して北部や大都会へ移住して行つた。このような黒人の「グレイト・マイグレーション(大移住)」の目的地のひとつが、イースト・セント・ルイスだつた。

低賃金で契約する黒人労働者は、白人労働者の脅威だつたから、この時期に、白人の差別主義者の黒人への憎悪の空気は陰鬱だつた。イースト・セント・ルイスの町では、一触即発の不安定な状況が見られたのである。そしてついに暴動が起きて、黒人が虐待される様子や、逃げまどう



ジョセフィン・ベイカーとジョー・ブイヨンと子供たち

黒人たちをジョセフィン・ベイカーは目撃し、記憶している。それがジョセフィンのトラウマになったばかりでなく、その後もアメリカ合衆国では、日常的に人種差別が存在していることを体験させられた。そのような状況のなかから、ジョセフィン・ベイカーは、ここから自由と平等の社会を望むようになったのだろう。

ジョセフィン・ベイカーは、子供時代に祖母の家に預けられている。祖母は物語りが好きな人だったようで、ジョセフィンは、祖母の語るお伽ばなしを聞きながら育っている。「眠れる森の美女」の城にも喩えられたレ・ミランド城は、ジョセフィンの子供時代の夢を実現する場所だったのだろうか。イースト・セント・ルイスの悪夢から遠ざかって、お伽ばなしの城が現実姿をあらわしたように見えるレ・ミランド城は、子供時代の夢物語の実現だったのかもしれない。

ジョセフィン・ベイカーは、レ・ミランド城にユートピア実現の地を求め、すくなくとも二〇年あまり、そこで自分の夢が十分に実現することを願って奔走したのだった。その夢がかならずしも十分に実現したのではなかった。ジョセフィン・ベイカーは経済的・経営的な才知の欠落した人だったから、いくら夫のジョー・ブイヨンが頑張つて、「虹の部族」に愛情を注ぎ、レ・ミランド城を「世界のキャピタル」にしようと運営の努力を重ねても、天才的な夢を抱くジョセフィンの前では、ベクトルは破綻の方向へ動いていかざるをえなかった。ジョセフィンの夢を現実化するには、数々の果てしない困難が伴ったのである。

一九六九年に、ジョセフィン・ベイカーは、経営破綻に陥つてレ・ミランド城を開け渡さねばならなくなる。まだ子供だった「虹の部族」を連れているジョセフィン・ベイカーに、そのとき援助の手を差し伸べたのは、アメリカ人の女優でモナコ王妃になったグレース・ケリーだった。

「虹の部族」の子供たちは元気に育つていった。そのうちの一人が大人になつてから病気で亡くなつたということだが、あとの子供たちは、主にフランス、モナコなどで暮らしている。かれらがそれぞれに語るジョセフィンとの思い出には差がある。ジョセフィンより、じつさいにレ・ミランド城に腰を落ちつけて、子供たちへ父親としての愛情を注いでくれたジョー・ブイヨンへの気持ちのほうが強いようだ。それでも成長したかれらが語るのは、エリザベスサンダースホームの子供たちと同じように、孤児・捨て子であつた自分たちが、ジョセフィン・ベイカーという世界的に名の知れた人の養子になつたしあわせである。

生みの親によつて与えられるはずの存在証明・存在保証が欠けるとときに、その愛情表現がジョセフィン・ベイカーのように、ときにエクセント

リックだったにしても、社会での認知という点で、ジョセフィン・ベイカーの養子であるということが大きな意味を持ったのは事実だろう。有名な母親を養親に持つことで、子供たちは自分の存在証明・存在保証を確認することができたのである。これはエリザベスサンダースホームの子供たちも同じで、よく知られた澤田美喜のエリザベスサンダースホーム出身という点で、就職にも有利だったと証言している例がある。

「虹の部族」の住む、人種差別のない、「世界のキャピタル」を建設するという偉大なるプロジェクトを、ジョセフィン・ベイカーは、一人で成し遂げようとしたのだった。そこが聖公会を背景にしたエリザベスサンダースホームと大きく異なっていた点である。このことを、一人でも成し遂げられると思ひ込める、進取の気性がジョセフィンには備わっていた、と言うこともできるだろう。このようないささか破天荒な勇氣は、とりもなおさずアメリカ的精神でもあった。

ジョセフィン・ベイカーを大きく育てたのは、たしかにフランスである。結婚によってフランス人になったジョセフィン・ベイカーは、フランス人として死に、フランスの地に眠っている。だがそのジョセフィンの真髄にあったのは、大きな冒険に挑み、困難に直面しても勇敢に立ち向かう、アメリカ的精神であった。

(この文章を書くにあたって、社会福祉法人エリザベスサンダースホームの施設長、藤村美津園長先生には大変お世話になりました。心より感謝いたします。澤田美喜園長がかつて居室にしていた、大磯の元岩崎家別邸の和室で、自由に資料を読ませていただきました。また澤田美喜記念館の鯛茂先生にもお礼を申し上げます。)

引用文献

- 石井好子『私は私』東京、岩波書店、一九九七年。
- 石井好子『さようなら私の二十世紀』東京、東京新聞出版局、二〇〇〇年。
- 小坂井澄『これはあなたの母』東京、集英社、一九八八年。
- 社会福祉法人エリザベスサンダースホーム編『思い出のママちゃま——エリザベスサンダースホーム創立者・澤田美喜園長の生涯』出版年不明。
- 澤田美喜『黒い肌と白い心——サンダース・ホームへの道——』東京、日本図書センター、二〇〇一年。
- Abley, Jacques. *La guerre secrète de Joséphine Baker*, Paris: Siboney, 2002.[1948].
- Baker, Josephine and Jo Bouillon. *Josephine*, New York: Paragon House Publishers, 1988.[1971].
- Bonini, Emmanuel. *La Véritable Joséphine Baker*, Paris: Pygmalion, 2000.
- Bonnal, Jean-Claude. *Les Milandes*, Le Bugue: P.L.B., 2002.
- Château des Milandes. *Château des Milandes: Ancienne demeure de Joséphine Baker*, 1992.
- Montaignac, Katya. *Chez Joséphine Baker au château des Milandes*, Arles: L'Esprit, 2002.
- Wood, Ean. *The Josephine Baker Story*, London: Sanctuary Publishing Limited, 2000.